

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00173

研究課題名(和文)百武兼行研究 - イタリア時代に焦点をあてて

研究課題名(英文)A Study of Hyakutake Kaneyuki:Focusing on His Italian Period

研究代表者

吉住 磨子(Yoshizumi, Mako)

佐賀大学・芸術地域デザイン学部・教授

研究者番号：20284622

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文):百武兼行(1842～84)のイタリア時代(1880～82)については、20世紀初頭の資料をもとに、三輪英夫氏によって百武の現地での行動や作品の基本的なデータのみが明らかにされている。これに対し、本研究はイタリアに存在する19世紀後半から20世紀初めにかけての資料と現代の文献の調査、そして現地調査によって、これまで不明であった百武のイタリア時代の新たな事実を明らかにした。具体的には百武が「チヨチャラ」を主題に繰り返し作品を制作した背景、百武のがローマで接した"Thouron"という人物の正体、そして、<ピエトロ・ミッカ図>(1882)を描いた背景やこの作品の図像の詳細な分析などである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本近代の初期洋画史上、最も重要な画家の一人と見做されながら、多くの点が不明とされている百武兼行(1842～84)の研究史の上で、本研究は次の2つの点において一つの画期となったと考える。まず1つ目は、百武の外国滞在期の研究を、百武滞在と同時代の同地(イタリア)の資料をはじめて調査することによって進展させたこと。これによって、これまで知られていなかった百武のイタリア滞在時のいくつかの事実が明らかになったこと。2つ目は百武のイタリア時代の作品を、百武と彼の最大のパトロンであった鍋島直大(1846～1921)の関係というコンテキストの中に置くことで、百武作品のもつ政治的な意味内容を解読した点である。

研究成果の概要(英文):Regarding the Italian period (1880-82) of Hyakutake Kaneyuki(1842-84), only basic data on Hyakutake's local activities and works have been revealed by Miwa Hideo, based on documents from the early 20th century. On the other hand, this study has explored new facts about Hyakutake's Italian period that were previously unknown, based on a research of Italian documents from the late 19th to the early 20th century and contemporary ones, as well as field research. Specifically, the background of Hyakutake's repeated works on the subject of "Ciociara," the identity of "Thouron" whom Hyakutake came in contact with in Rome, and the political background of his painting "Pietro Micca" (1882) and a detailed analysis of the iconography in this work.

研究分野：美術史

キーワード：百武兼行 アッカデーミア・ジージェンリー・ジョゼフ・チュウロン ピエトロ・ミッカ図 ピエトロ・ミッカとリソルジメント 鍋島直大の芸術保護 鍋島直大とサヴォイア家 幕末明治初期の日伊外交

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

百武兼行(1842~84)は近代初期日本の洋画史上、最も重要な画家の一人であるとみなされているが、百武についての研究は進展しているとは言いがたい。具体的に言えば、三輪英夫氏が1970年代中頃から1990年代中頃にかけて行った百武の作品と資料調査によって、百武の生涯と画業が明らかにされると同時に、作品の制作時期の特定などが行われたものの、それ以降、四半世紀以上もの間、百武の研究はほとんど何も行われていない。百武研究が遅々として進まない原因の一つは、百武の絵画修行と作品制作のほとんどは、外国(英国、フランス、イタリア)においてなされたが、外国滞在期の百武の行動や作品制作の実態を詳らかにするには、外国語の資料調査や現地調査が不可欠とされるにもかかわらず、それらの調査に足を踏み入れることが、日本近代美術史の研究者たちによって敬遠されてきたことにある。

本研究者(=吉住)は、もともとイタリア美術史を専門とすることに加え、百武の生地であり、百武の重要作品を所蔵する美術館、博物館が所在する佐賀県に居住しており、本科研に着手する前から、百武の作品を佐賀県内で調査研究する機会を得ていた。また、ローマの図書館やトリノの「ピエトロ・ミッカ博物館」において、百武研究に必要な資料の収集を始めてもいた。そして、2017年から2018年には、勤務先の紀要に百武のイタリア時代に関する2編の論文を投稿していた。

このように研究の準備態勢を整えた上で、吉住は2019年度に本研究に着手することとなった。

2. 研究の目的

美術史上の百武兼行の評価やその位置づけとは、「日本人で最も早く油絵を描いた画家の一人、同様に最も早くヌードを描いた画家の一人、そして、百武がヨーロッパで習得した古典主義やバロック的な絵画様式は、百武が帰朝(1882年/明治15年)した明治10年代後半の日本の画壇にとっては珍しいものであったが、百武の早世によって、日本画壇はその受容も継承もできなかった」というものである。これらの評価のいずれもが事実ではあるものの、それ以上踏み込んだ分析はほとんど行われていないのが現状である。

本研究者は、今後、10年くらいの時間をかけて、段階的に百武の外国滞在期(イタリア、英国、フランス)の研究を進めるとともに、それと並行して、百武が日本に居た時期(幼少期や外国から一時帰国した時期)についても詳しく調査を行うことによって、百武の生涯や百武の作品制作においてこれまで不明であった歴史の一片一片を丁寧に埋めていく作業を行っていく計画である。それによって、日本近代初期洋画史の中でこの画家の果たした役割やその位置付けを再評価することを目的とする。

以上が、現在想定している百武研究の最終的な着地点であるが、本研究においては、イタリア時代(1880~82)の百武の行動や交友関係について詳細な調査を行うことにより、特に<ピエトロ・ミッカ図>、<鍋島直大像>、そして、チョコチャラをモデルとした作品群について調査・考察した。

3. 研究の方法

研究の方法は、資料調査と作品調査の2つに大別される。まず、資料調査については、これまで日本で刊行された、百武に関する資料、鍋島直大に関する資料、その他の3つに分けて資料を収集し、それらを解読することによって、百武研究において、分かっている点と不明な点を確認した。

一方、日本語の1次資料については、まずは、百武に関するもので、三輪(1979)に目録として掲載されている資料を可能な限り実見し、確認しようとしたが、この作業には殊の外時間がとられた。なぜなら、それらのほとんどの所在先が不明であり(三輪氏は資料の所在についてほとんど明記していない)、佐賀県の美術館関係者や三輪氏と交流があった人物にもインタビューするなどして、所在先を突き止め、資料にアクセスしようとしたが、現在のところ思うような結果が得られていない。

次にイタリア語の関連資料や文献調査については、2019年の現地調査時とそれ以前に収集していた資料やそのコピーを解読することにより、イタリア滞在時の百武の行動や作品の図像の意味などについての考察を進めた。2020年と2021年にもイタリア現地調査を予定していたが、Covid19ウィルスの蔓延による行動制限のため、いずれの現地調査も果たせなかった。

2019年の夏の現地調査は、ローマ、トリノ、サリアーノにおいて実施した。百武はローマに滞在中、サン・ルーカ・アカデミーの教授を務めたチェーザレ・マッカリに油絵を習ったが、2019年の調査においては、19世紀に同アカデミーで描かれた作品を実見したり、ローマの図書館でそれらの作品の写真調査を行ったりすることで、当時のイタリアの官学派の作品テーマや様式の傾向を理解することを目指した。百武がローマで描いた大作で、ルーベンス作品(百武のイタリア滞有時はベルギーの個人蔵)のコピーである<ネメアのライオンと格闘する男>(1882)は、

後補が多く、百武作品のオリジナルからかなり改変されていると考えられている作品ではあるが、百武がこの主題で油絵を描いたことは事実である。19世紀にイタリアでルーベンスのこの作品のコピーが描かれた先例があるのではないが、百武にはそのコピーを見る機会があった、あるいは、マッカリら百武の周辺にいた人物がこの主題を百武に伝授したのではないか、という仮説に基づき、上述のような方法で官学派作品の調査に着手したが、1週間ほどの現地調査によっては、その仮説を説得力のあるものとする手がかりは見つけられず、この作品についての調査はいったんそこで終えることにした。

一方、トリノとサリアーノにおいては、それぞれ1864年と1880年に建立されたピエトロ・ミッカ像を実見し、写真資料からだけではわからなかったそれらの像のディテールを調査し、写真撮影を行った。このような現地調査と文献調査の両方によって百武の〈ピエトロ・ミッカ図〉の詳細な図像の意味を探ることができた（詳細は次項）。

4. 研究成果

以下に示すように、科研によって論文4編の刊行、学会における口頭発表1回、そして、研究成果を広く研究者や市民に報告する機会として、コロキウムを開催した。

上の「2. 研究の目的」に記した については、同時代資料（1880年代のイタリアの新聞や雑誌）を含め、ピエトロ・ミッカの先行作品に関わる文献調査を、主にイタリアにおいて実施した。過去の百武研究において、このような調査が行われたことはなかった。その結果、百武の〈ピエトロ・ミッカ図〉の図像は、19世紀の同図の図像伝統を踏襲していることを実証した。また、ローマでは先例のなかったピエトロ・ミッカの図像を百武が取り上げた背景には、幕末明治初期における日伊関係をプロモートした百武のパトロン鍋島直大（1846～1921）の存在があったことを、直大の渡伊以前からイタリア滞在中の行動から裏付けた。

上の「2. 研究の目的」に記した については、この肖像画は単なる一政治家（駐イタリア日本全権特命公使）の肖像画ではなく、百武は、この作品を鍋島家による日伊の良好な友好関係、外交関係の構築を表象する外交の装置として描いたこと、百武は、肖像画や歴史画がそのような機能を持ちうることを、イタリアにおいて知るに至ったことを指摘した。

百武はイタリアとそれに先立つパリ時代においてもチョチャラ（ローマ近郊のチョチャラ地方の女性）をモデルとした作品を数多く描いている（確認されているものは10点以上が現存）。19世紀中頃以降、ローマに滞在した画家たちの多く（百武のパリにおける師レオン・ボナもその一人である）がチョチャラを描いたが、百武もまたその系譜に位置づけることができる。2019年に勤務先の紀要に発表した論文においては、ローマにおける百武の制作環境にはモデルとしてのチョチャラが多いたこと、パリ時代に百武がチョチャラを描いたのは、ボナの影響があることなどを、状況証拠を重ねながら指摘した（上の「2. 研究の目的」）。

また、松岡壽が書き残している記録から、百武と松岡はローマで「チュウロン」という名のアメリカ人画家によってチェーザレ・マッカリを紹介してもらい、アッカデーミア・ジージという名の画塾に案内されたことがわかっている。しかしながら、この「チュウロン」の正体がこれまで明らかにされることはなかったが、この度の科研において、「チュウロン」はヘンリー・ジョゼフ・チュウロン（Henry Joseph Thouron, 1851～1915）に同定した。

以上の知見は、いずれもこれまで百武兼行研究では全く指摘されてこなかったことであり、これによって、百武研究に、わずかではあるが新たな地平を開くことができたと考えている。

研究成果のさいごとしては、科研の総まとめとして、コロキウム「近代日本と近代イタリアの共鳴 佐賀の近代史と日伊関係史から照射する日本近代美術史の新側面」（2023年3月4日）を佐賀で開催し、本研究の成果を広く一般（参加者80名）にも報告する機会をもった。

コロキウムでは、美術史のみならず、日伊関係史、幕末・明治初期の佐賀藩の歴史の専門家を集め、各人が登壇して、百武のイタリア時代が日伊関係史において、どのような時代であったかをあぶり出し、日伊関係史の中で百武のパトロンであった鍋島直大が果たした役割に焦点を当てることによって、百武の作品の政治的な意味を明らかにすることができた。

本科研では百武のイタリア時代の全ての作品や問題を扱うことはできなかったが、今後は残されたイタリア時代の問題について研究を継続するとともに、順次、百武の英国時代についての研究にも着手したいと考えている。

参考文献： 三輪英夫「近代の美術 53 百武兼行」至文堂、1979年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 吉住磨子	4. 巻 第4号
2. 論文標題 イタリア時代の百武兼行 - 『国際芸術家協会』との関わりについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉住磨子	4. 巻 第9号
2. 論文標題 イタリア時代の百武兼行研究 ローマにおける制作環境と画題選択の背景を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 公益財団法人鍋島報効会研究助成研究報告書	6. 最初と最後の頁 119 ~ 147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉住磨子	4. 巻 V3
2. 論文標題 イタリア時代の百武兼行V<チュウロンの正体>	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 117 ~ 124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉住磨子
2. 発表標題 百武兼行《ピエトロ・ミッカ図》（1882年）再考
3. 学会等名 明治美術学会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 吉住磨子
2. 発表標題 イタリア時代の百武兼行 ローマにおける制作環境と画題選択の背景を探る
3. 学会等名 公益財団法人鍋島報効会第18回研究助成研究報告会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関